

海外研修報告

魏から唐代を中心とする中国古代造瓦技術の研究 日本学術振興会特定国派遣（長期）により、中国で研修を行なった。主たる受け入れ機関は当研究所と都城制の共同研究協定を結んだばかりの中国社会科学院考古研究所である。この研究所のフィールドである鄆城、洛陽城、長安城、揚州城、元大都の瓦に加え、渤海龍泉府、金阿城（黒龍江省）などの瓦について、主として製作技術の観点から調査を行なった。中国の瓦の研究は現在もなお秦漢代中心であり、日本が造瓦技術を学んでいるそれ以降の時代の瓦研究は進んでいない。一般的な印象として、唐代の瓦当文様が日本の古代瓦のそれに劣る旨を中国人の研究者に告げると、摸索期の瓦は何處も力を入れて造るもので、中国でも秦漢代の瓦は美しいから研究者も多いとの返答であった。といえば日本でも、中近世瓦はようやく本格的な研究対象になり始めたばかりである。なお研究成果の一部は『日本中国考古学会会報』第2号（1992年）に発表した。（佐川正敏）

日韓馬具の比較研究 標記の研究テーマのもとに、1991年9月1日から30日までの日程で、日本学術振興会特定国派遣研究員として大韓民國を訪れた。韓国文化財研究所のお世話になり、韓國各地で三國時代の馬具を観察することができた。ソウルでは折しも中央博物館で「伽耶展」が開催されていたのは幸運であった。滞在期間の約半分は韓國內各地を旅行しながら遺跡、遺物を見学した。訪問地は清州、慶州、大邱、釜山、陜州、全州、扶余、公州などである。各地で博物館、文化財研究所、大学校博物館が所蔵する馬具を観察したほか、遺跡も多数見学し、研究者と意見交換できたことも収穫であった。最も興味深かったのは、伽耶地域の遺物、遺跡の地域色である。大伽耶連合の構成国を考古学的に復原できそうで、各々の国と日本との関連を追求することが可能になりつつある。古墳時代の日韓関係研究も新たな展開が期待できる。また、慶州文化財研究所が新羅地域について、都城、寺院、山城、墳墓を総合的に調査研究しているのを知り、わが調査部と思い合わせてうらやましい限りであった。9月26日には文化財管理局で「日本出土の鉄製轡」と題して発表を行った。

イタリア庭園の意匠・構造・立地に関する研究 1991年9月10日から翌年1月10日までの日程で、日本学術振興会特定国派遣研究員としてイタリアを訪問した。ICCROMにおける各種資料の収集の他、北イタリアおよびローマ、ナポリを中心として現存庭園や遺跡庭園の実地踏査を行った。作庭年代、規模、立地条件などにもよるが、イタリア庭園の多くは概ね傾斜地に造成された何段かの長方形テラスから構成され、とりわけルネサンス以降の例では整形式の植栽や園池、あるいはイタリア特有のイトスギの並木によるビスタの強調など、日本庭園に比してきわめて人工的なデザインとなっている。しかし日本庭園と同様、外部の自然景観と人工的庭園景観との視覚的結合を意図した構成が主流となっていることを、各種のヴァリエーションの中に確認することができた。また、こうした構成手法の源流や発展過程に関わる種々の事例を都市内に遺存するオープンスペース構造の中に発見することができた。(本中 真)